

琉球大学学術リポジトリ

ドイツの城と日本の城—教職教科科目・総合演習「
欧米の文化と国際理解」を担当して—

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部国際言語文化学科欧米系 公開日: 2008-10-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 片岡, 満寿男, Kataoka, Masuo, 片岡, 満寿男 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/7607

ドイツの城と日本の城

— 教職教科科目・総合演習「欧米の文化と国際理解」を担当して —

片岡満壽男

教育職員のための教科に関する科目として総合演習が開設されたが、そのうち文学系の教官の担当とされた「欧米の文化と国際理解」は2002年度後期に初めて開講された。これはオムニバス方式で行われ、担当者別に凡そのところイギリス文化、アメリカ文化、イギリス文化、ドイツ文化の4つの文化と国際理解という風に割り振られた。私はドイツ文化と国際理解という課題でのぞむことになったが、国際理解ということになるとどうしても自国文化との比較に頼ることになる。さもないと学生が受身になってしまうからである。しかし自国文化との比較ということになると、日本との比較の対象をドイツだけに限るとうまくいかないことも多い。日本とヨーロッパとの比較とか日本と欧米との比較という風に広げないと、よいテーマが見つからないこともある。3回あった担当日のテーマを挙げておくと次のようなものであった。

1. マフィアと暴力団
2. ドイツの城と日本の城
3. 昔話と伝説

ここでは「ドイツの城と日本の城」というテーマで行った講義演習を取り上げたい。

I 講師の基調報告： ドイツの城

学生がドイツの城を日本の城と比較するには、まずは講師の側からのドイツの城とはという基調報告ということになる。

1 ドイツにおける城のイメージ

まずはドイツの城についての定義である。「城皆とは、塔があり、その周りに

囲壁があって、両者が互いに防御しあっている場所を言う」との定義をブムケが紹介している（ブムケ， P. 149）。更に、ドイツ人にとって城 Burg のイメージとはということでドゥーデンの図解辞典を見てみると、

【図表 1】 参照（図表は後ろにまとめて呈示した）

濠（あるいは堀）や狭い入り口を持つ多層の塔、そして鋸壁（きょへき）や防御機能を持った高い囲壁が城の外観をなしている。

ドイツ人の城のイメージについては、更にドイツの小学校 4 年の教科書に城を紹介しているものが見つかった。

【図表 2】 参照

この【図表 2】は人の動きなど描きこまれていて生き生きとしているが、【図表 1】と若干違いがある。例えば【図表 2】では②Palas（パラスあるいは主殿）と③Kemenate（婦人部屋）がひとつの建物に描かれているが、【図表 1】ではパラス（番号30）は婦人部屋（番号10）とは別の建物になっている。パラス Palas にはいずれの場合も騎士の間があり、これは公的な機能を持っている。一方婦人部屋は城主の家族のプライベートなところである。殿様は普段どこでおやすみになったのか。とりわけドゥーデンの図解辞典の【図 1】のように、パラスと婦人部屋が別の建物である場合、彼のベッドはどちらにあったか。

【図表 2】を拝借したドイツの小学校の教科書は、日本の小学校の社会と理科とをいっしょにしたような教科書で、それは Sachunterricht あるいは Sachkundenunterricht と呼ばれる社会自然事情の授業のためのものである。教科書会社別に 4 社ほどあつたのだが、城をとりあげていたのはここに紹介した小学校 4 年の教科書ひとつだけだった。その記述するところも見てみよう。城の一番目立つものは天守 Bergfried であるが、

「城の主塔は天守だった。それは最強の壁を持ち、もっともよく防備されてい

た。天守は城内の最も安全な場所だったのである。攻撃の者たちが既に城内に入り込んでしまった場合、それは城の住人にとって最後の逃げ場になるのだった。」(Pustebume. Das Sachbuch 4, S. 111)

ヨーロッパの城を知ろうと思う者には大切な記述もある。それは、

「しかしこの時代、どの城をとってみても他の城と同じということはなく、天守の利用の仕方も異なることが多かった。いくつかの城には城主の居住用の部屋部屋は天守にあった。ドイツの城では城主は、パラスと呼ばれる自分用の建物で生活していた。パラスには騎士の間があり、そこで祝祭が行われた。」(ibid.)

教科書の説明のこのくぐりだけは歴史的学術的なことに気を配っている。ただしドイツ的な城の図しか呈示されてはおらず、それなのに上の引用にもあるように突然ドイツ的な城とは違ったタイプの城の話を出すと、ドイツ人でも小学生には負担ではあるまいか。それはともかく日本の学生には、天守が居住の機能をそなえている城の図も用意した。それは後述することになるが、フランスの影響を受けた城である。それとドイツ的な城と区別しておこう。

- i. 天守に大広間がある = フランスの影響を受けた城
- ii. 天守とパラスは別の建物 = ドイツ型の城

パラスはドイツ型の城に独特なものであり、それは公的な大広間を持っている。そしてパラスは婦人部屋とひとつの建物をなすこともあり【図表2】、またパラスと婦人部屋のそれぞれが別々の建物であることもある【図表1】。

2 英仏の城

天守はフランスでは「ドンジョン」Donjon、イギリスでは「キープ」keep と呼ばれ、囲壁に囲まれて偉容を誇っている。イギリスの城のイメージ

を見てみると、

【図表 3】 参照

イギリスの城の天守はドイツの城の天守に比べると巨大である。更にその巨大な天守の中を見てみると、

【図表 4】 参照

それは軍用用の塔であるとともに（警護の者の部屋）、公的な集会も行われたが（大ホール）、城主とその家族のプライベートな住まいの階もある。これを見るとイギリスの城では天守ひとつにいろいろな機能が集中している。先のドイツの城では2つないし3つの建物に分かれていた機能が集められているのが分かる。天守が巨大になる所以である。

フランスの城の天守ドンジョンも強大である。写真で見ると防御機能が高そうで、圧倒される（太田静六『ヨーロッパの古城、城郭の発達とフランスの城』）。ドイツもフランスに接する西部ではフランスのドンジョン・タイプの影響を受けている。しかも「ドイツの諸侯たちの中にも、フランスの影響を受けてであろう、フランスのドンジョン型の塔を好むものはいた。」（ブムケ、P.150）という。

3 パラスとしての「皇帝の家」

ドイツ・タイプの城は、天守 Bergfried とは別に、その横にパラス Palas が建てられ、ここに騎士の間となる大ホールがあった。これにより天守は、ブムケによれば「軍事的な目的しか果たさなくなり」（ブムケ、P.150）、外観としては、囲壁の塔と変わらないことも多かった。

天守とパラスを別個に建てるタイプの城がドイツで一般的になったのはいつのことか。皇帝フリードリヒ1世が城作りに熱心だったから、それによって王宮（あるいは帝宮）のつくりがドイツの城のつくり大きく影響したことは

間違いない。いずれにしてもドイツ・タイプの城の特徴を知るには、王宮のつくりを見ておかねばならない。しかも皇帝フリードリヒ一世以前から、王宮はドイツの城の様式に影響を与えてきたようである。そしてそれを語るにはドイツ史のおさらいもせねばならない。

【資料 II】 参照

年表を見ながら、カール大帝、ハインリヒ 2 世、ハインリヒ 3 世と彼らの王宮建設を見ていこう。

i. フランク王国のカール大帝は *palatium* を建設した。それは彼がローマやラヴェンナ訪問から影響を受けたからであった。*Palatium* というラテン語は後に *Pfalz* (王宮) とか *Palast* (宮殿) という風にドイツ語化する。そして *Palas* (パラス) も *palatium* を語源とする。結局のところ騎士の城のパラス (*Palas*) とは、王宮 (*Pfalz* ないし *palatium*) をイメージしたところ由来するのだろう。

ii. ゴスラルに王宮 *Pfalz* を建てたのはオットー朝最後のハインリヒ 2 世である。但し「皇帝の家」*Kaiserhaus* の二階は木造だったらしい。この二階が祝祭や会議のための大ホールである。この「皇帝の家」をヴァルター・ホッツはパラスと呼んでいる (Hotz, S.82)。

iii. ゴスラルの同じ敷地内に1040年ザリエル朝のハインリヒ 3 世は、2階の大ホールも石作りの「皇帝の家」を建設した。これが展覧会用のジオラマとなったのを写した写真を見てみると、

【図表 5】 参照

ジオラマ写真の右側は王宮の世俗の側で、右上から 3 分の 2 ほどは「皇帝の家」*Kaiserhaus* であり、その二階は大ホールである。「皇帝の家」は騎士の城でいえばパラス *Palas* に当る。

「皇帝の家」に向って、それに接する右側 3 分の 1 ほどが、皇帝およびそ

の家族の住まいである。そのせいかこの構内には居住用の塔、即ちドンジョンが見当たらない。騎士の城で云うなら、パラスに接して婦人部屋を建てた形である。しかしドイツ型の天守は、即ち居住用ではない天守は、まだ姿を見せていない。

皇帝およびその家族の住まいの前には、即ちジオラマ写真では右下に、並行する廊下が伸びたその先には、王宮チャペル Pfalzkapelle がある。これはドイツ国王ないし神聖ローマ帝国皇帝のプライベートなチャペルである。

王宮チャペルは現在では位置が変わっている。現在のゴスラルの王宮では、王宮チャペルは「皇帝の家」に向って左側にある。立て替えられたということになる。建て替えられたのは「皇帝の家」も同様である。ただ、「皇帝の家」の位置はその後もほぼ変わりなく、現在の建物もほぼハインリヒ 3 世の時の偉容を伝えているという。

チャペルは騎士の城にも必ずある。初めに見た二つの城の概念図で、【図表 1】では番号 29、そして【図表 2】では④がチャペル Kapelle である。これらからチャペルはドイツでは天守とは別個に建てられるのが普通だったということになる。これに対してイギリスの城のチャペルは、【図表 4】の場合、天守と接して、しかも天守と同体であるように建てられている。

また【図表 5】に戻って、ゴスラル王宮のジオラマで、写真の左側に半分ほど見えるのが「王宮司教座教会」であるが、これは「王宮チャペル」とは異なる。「王宮司教座教会」には、時にはローマ教皇がやってきて教会会議を開いたりもする。一方「王宮チャペル」は皇帝あるいはドイツ国王の私的な礼拝堂である。

4 バラスのある城

ドイツで石造りの城が次第につくられるようになった11世紀には、それはドンジョン型の城であった。まだパラスのあるドイツ型の城ではなかった。Donjon はドイツ語では Wohnturm (居住用の塔) と訳される。そしてドンジョンが発達すると、この中に騎士の間のホールのある階も出来る。そしてこの大きな塔となったドンジョンを天守として四囲に囲壁と望楼を作れば、英仏のキャッ

スル、シャトーの出来上がりである。即ちこのつくりでは天守はパラスとひとつになる。あるいはパラスは天守のひとつの階をなしているのである。

ドイツでは主流は別の方向を取った。即ちパラスは天守とは別の建物になったのだった。それがどのような経緯でなのかがこの基調報告の主眼である。

1992年のザリエル展のカタログは、「最近」パラスの初期のものが発掘されたと伝えている。

【図表 6】

これは普通の騎士の城である。この城がつくられ始めたのはザリエル朝後期の11世紀終わりから1100年にかけて、パラスは1100年ごろという。

【図表 6】のジオラマ写真には天守は見えないが、パラスが見せ所の城というのみならず、天守がないところまで、ゴスラルの王宮に似ている。しかもこのパラスに当たる建物には公的な大広間だけでなく、居住に用いられる部分もあるという。そして解説では、この城にパラスがあることについて、「恐らくは王の模範にならって」と言われている。王宮 Pfalz の影響が恐らくあるだろうと言うのである。

右上に見える塔は入り口の見張りの塔であって、天守ではない。天守が建てられたのは後になってからのことだという。

天守がなくてパラスが見せ所の城とは会議用、宴会用の城かと思う向きもあるが、この城の形状、およびこの城の北側に首形濠（Halsgraben）があるのを知れば、その位置から防御の意図が察せられよう。即ち首形濠とは、山が半島状に突き出たところに立つ城を、山から切り離して隔てる濠である。

5 皇帝フリードリヒ 1 世の築城の影響

ドイツでは城 Burg を解説しようとする、その前提として王宮 Pfalz を語らねばならない。騎士たちの城に王宮が与えた影響の一端は既に見た通りであるが、そのあとの皇帝フリードリヒ 1 世の築城熱は看過できないものがある。彼はいくつかの王宮をつくり、たくさんの城をつくった。そのフリードリヒが

ドイツ国王に選ばれたのが1152年、そしてローマで1155年すぐに皇帝となり1190年まで帝位にとどまった。即ち彼が皇帝であった期間は長く、そのせいか彼の王宮 Pfalz は専門家も帝宮 Kaiserpfalz と呼んでいる。王宮と帝宮には違いがあるのか。名称から帝宮は王宮よりも豪華そうであるが、ゴスラルの王宮が会議用に見栄を張って大らかであるのに対して、皇帝フリードリヒ1世がいくつかが作った帝宮はむしろ戦闘的で質実剛健である。しかし彼の帝宮も王宮であることに変わりはなく、以後王宮とも帝宮とも記す。

皇帝フリードリヒ1世の王宮は防御機能が高く、城 Burg に近い。しかも防衛上あるいは山の背に、あるいは水郷の背後に造営されるなど、騎士たちの城の理想に近く、貴賓のもてなしもせねばならない王宮のあり方からは遠い。そのような例としてフリードリヒ1世のカイザースヴェルトの王宮を見てみよう。ライン川の流れを防衛に利用するために、州(す)に町と教会と王宮をつくっている。

【図表7】

王宮には濠をめぐらしている。

【図表8】

この城からライン川に臨むと、この川を行き来する船に睨みをきかせることが出来る。しかもこの王宮には立派な天守 Bergfried がある。

【図表9】

この復元図で、前面のライン川に面したのがパラスで、その背後にある塔が天守だとはすぐに見て取れる。これを【図表8】の図面と較べてみると、ライン川に面するパラスとすぐ背後に接して天守が位置する、それどころか図面ではこの二つはひとつの堅牢な建物のそれぞれの部屋である如くである。ドンジョ

ンとの違いはあるのかと自問して、ふたたび復元図の【図表9】を見ると、天守は塔としてそびえ、パラスは居館の趣の建物で、天守とパラスとが少なくとも別の建物の外観は持っているとするのである。フリードリヒ1世は城の防御機能を追及して天守とパラスをその中心部でひとつにしようとしたらしい。一方、外観が別の建物であるというのは、天守とパラスは別物であるというドイツの様式感覚がそうさせたのか。

皇帝フリードリヒ1世はこうした戦闘的な城まがいの王宮をいくつかつくったが、騎士たちの城へのその影響については、ブムケが彼の廷臣たちの城に言及している。それによれば、「帝宮と同じ様式をもち、同様に高水準の芸術的形姿を具えた城もいくつかある。これらの城を建設したのは皇帝フリードリヒ一世の顧問や宮廷官僚といった側近に属する貴族たちである」(P. 148)。廷臣たちのつくった城は騎士の城ということになる。するとドイツでパラスのあるドイツ型の城が増えていくのは皇帝フリードリヒ1世の12世紀後半以降からということになるだろうか。そしてフリードリヒの廷臣だけでなく、その他一般の騎士たちの城に王宮が与えた影響について、あとは推して知るべしだろう。ただドイツで、城にはパラスがあるものとのイメージが出来上がったのは、フリードリヒ1世以前のこともかもしれない。

II レポートのテーマの提案あるいは指導

・講師の基調報告「ドイツの城」に学生が自分の調査を加える。

調査とは、講師の挙げた参考書および／あるいは自分で見つけた図書による調査を言う。これは手堅いレポートの書き方である。もちろんそのためには講師の報告をちゃんと聞いておらねばならない。加えて、英仏の城と比較するとよいものが出来るだろう。文献はヨアヒム・ブムケ『中世の騎士文化』、三谷康之『事典 英文学の背景 城郭・武具・騎士』、太田静六『ヨーロッパの古城 城郭の発達とフランスの城』が挙げられるが、他にも出てきそうである。

・ドイツの城と日本の城とを調査し、比較する。

このテーマは見かけほど容易ではないが、西ヶ谷恭弘『城郭』の記述および図絵をもとに凡そ下記のように手がかりを求めた。

日本の城というとき、そのイメージは16世紀後半以降の城ではないだろうか。とりわけ16世紀末から17世紀にかけての織豊期のものは、そびえる天守がある、石垣に囲まれた城、これが日本の城のイメージといえるのではないだろうか。

さて、織豊期の城郭では、天守は主殿（入母屋造りの一層または二層の建築）の上に望楼を乗せたものといわれる。これはヨーロッパの城を念頭におくと英仏のドンジョン型に似ている。ドンジョンは公私の居住の機能を備えた大きな塔であった。これに対しドイツの城は塔とパラスが分かれ、そしてこのパラスに騎士の間のホールがあるのだった。この辺を踏まえれば、ドイツの城と日本の城の違いを論じられそうである。しかも時間が許せば英仏の城と三つ巴で。

一方、ドイツ人のイメージする城は中世の城である。騎士の城である。ブムケによれば「11世紀以来、高級貴族たちは出身地の館や屋敷を捨て、しばしば莫大な費用をかけて、人の近づきたい土地、例えば山の背に、また水郷の背後に、防衛機能を備えた城砦を建設し、それを住居としたのであった」（P. 143）。ドイツでは水城も少なくないが、主流は山城である。そして城 Burg はそのほとんどが12世紀と13世紀につくられた。14世紀にはしかし城はその意味を失っていく。15世紀になると人々は居住性を重んじるようになり、山から町に降りて来るのである。

ドイツ人のイメージする城が中世の城であり、日本人のイメージする城は織豊期以降のものであるらしい。すると城に関する日独の時間差は400年ほどにもなりうるが、そもそも比較することは意味があるのか。

織豊期の城は平山城が多く、しかも天守はパラスに当たる主殿が取り入れられており、さらには城内に御殿などを配したりもすることがある。ここに戦国の終わりを指摘するのが普通である。それでも織豊期の城に人々が見るものは、いかに守るかという築城技術の粋である。例えば熊本城など戦意がみなぎっている。それだけではなくその戦闘性は中世の山城（やまじろ）に遡る。山城には各地に割拠した群雄が盾籠ったのだった。その山城を下りたのは日本の場

合、統治の便と居住性の追及だけだったろうか。とりわけ織田の家臣団にあっては天下を求めて戦おうとの志に由来するものではなかったか。そう見てくると時間的なずれがあろうと、人々が城に求めるイメージには日欧に共通したものがあるかとも思える。こうしてみると、城に関してレポートで日独日欧の比較をすることにはそれなりの意義が見出せるのではないか。

・沖繩の城とヨーロッパの城

学生の側に強い関心があれば沖繩の城とドイツの城を比較することも出来るだろう。取り上げやすいのは再建された首里城だが、ドイツの城と比較するには、城としての、グスクとしての首里城を見ていかなければならないだろう。門とか石垣とかの防御機能に注目して比較する仕方もありうるだろう。

・宮殿

提出されたレポートにはスペインのアルハンブラ宮殿とドイツの「ブルク」を比較したものがあつたが、宮殿を城と前置きなく比較するのは読んでいて落ち着かないものである。むしろアルハンブラ宮殿ならその防御施設に絞れば、城と比較しようもあろうかと思う。

あるいはアルハンブラ宮殿に宮殿として魅せられたというなら、比較すべきドイツの方も宮殿にした方がよいだろう。これはまた沖繩の首里城を取り上げてドイツのものと比較する場合にも言えることである。

・他には十字軍と城郭建築とか、五稜郭とヨーロッパの稜堡式築城とか、はては騎士道と武士道などなど

十字軍は聖地でどのような戦いをしたかが、橋口倫介『十字軍騎士団』（講談社学術文庫）にある。これを城の観点からまとめるのがよいだろう。本当は十字軍がヨーロッパの城郭建築に与えた影響について論じてほしいところだが、翻訳書では追いつかないかもしれない。

ヨーロッパの稜堡式要塞については、すこし昔のことになるが、学生がレポートしたことがある。「ドイツのことばと風物」という科目でザールルイと

いう都市について簡単なドイツ語の記述を読んだ。ザールルイは独仏国境の都市でルイ14世の征服のあと、フランスの稜堡式要塞がつくられたところである。そのレポートは、築城の名手ヴォーバンの要塞をはじめ、その前後の時代の要塞について紹介していた。学生の興味次第では思いもよらないレポートが出てくる例だろう。

騎士道と武士道の比較とか、そもそも騎士道というテーマなら、中世騎士物語がとりわけアーサー王伝説とかかわりが深く、英語系の学生には色々物語や文献が見つかりそうである。騎士道は人格の完成を求める。日本の武士道は、宮本武蔵は、葉隠れはどうか。

騎士が己を磨くのは冒険の旅においてである。その一方現代では男の子に冒険の機会がなくなつたと言われており、それがすぐれて教育上の問題だとする人もいる。即ち教職を目指す学生のための「総合演習」で城をテーマに取り上げたのは、これが騎士道について触れる機会ともなれば、そしていつの日か教育について考える際のひとつの手がかりともなればとの意図も込められている。とりわけ学生に女子が極めて多い国際言語文化学科にあって、彼女たちが将来男子生徒を扱うことになるかもしれないと想定すればなおさらである。

後記

「総合演習」、しかも「欧米の文化と国際理解」というようなことが求められた講義演習の場合、実見や実体験にもとづく話がより説得力があろう。昨年の秋、ドイツ言語文化コースの海外文化研修でゴスラルの王宮を見ることができたのは、研修で学生とともに見て、総合演習のような時間を借りて語り継ぐことができるという意味で貴重な体験だった。

ゴスラルではさらに錫像博物館 Zinnfigurenmuseum で琉球大学のヴェーバー先生がつくったジオラマを見ることができた。それはゴスラルの王宮の王宮司教座教会（【図表5】では左側参照）で起こった歴史的事件に取材したもので、とりわけ王宮司教座教会は今日ほんの一部しか残っておらず、するとゴスラルの王宮に興味がある者にとってそれがどのようなものだったかを見ることは感激の一瞬のはずである。

文献一覧

- ブムケ、ヨアヒム：中世の騎士文化。1995年 白水社
- プレティヒヤ、ハインリヒ：中世への旅。騎士と城。1989年第9刷 白水社
- 田中仁彦：ケルト神話と中世騎士物語。2002年第9版 中央公論社
- バーバー、リチャード：騎士道物語。1996年 原書房
- 三谷康之：事典 英文学の背景。城郭・武具・騎士。1992年 凱風社
- 太田静六：ヨーロッパの古城。城郭の発達とフランスの城。1989年
吉川弘文館
- 西ヶ谷恭弘：城郭。平成5年再版（初版昭和63年）東京堂出版
- 日本城郭体系18巻別巻2。昭和55年 新人物往来社

学生のレポートでは更に次の文献が挙げられていた：

太田静六：ドイツ・北欧・東欧の古城。1992年 吉川弘文館

その後入手したもの：

野崎直治：ヨーロッパ中世の城。1989年 中央公論社

資料 I 定義

ドイツの城 (Burg) の定義：

〈ヨアヒム・ブムケ『中世の騎士文化』148-149ページ〉

「城砦とは、塔があり、その周りに囲壁があつて、両者が互いに防御しあつている場所を言う」（『ツューリヒ説教集』二一頁）。つまり深い濠、狭い入口をもつ多層の塔、そしてツィンネや防御機能をもった高い囲壁が、城砦の外観を決定していたのである。

貴族の有する、こういった新しいタイプの城は、あわやという時に大勢の人間を収容するために作られた古い避難城砦とは異なるものである。十一世紀以来登場してきたこの新しいタイプの城砦は、敷地面積の縮小と防御施設の進歩によって、そして建築資材としてほとんど石のみを使用するようになったことによって、また何よりも、塔が城の中心になったという建築構成において、新しいものであった。

（注）城のドイツ語 Burg はここで「城砦」と訳されている。本文中ではドイツの城 Burg は「城」としたが、ブムケを引用する時は「城砦」となっている。

日本の城の定義：

〈『広辞苑』第五版〉

しろ【城】 敵を防ぐために築いた軍事的構造物。日本では、古くは柵（さく）や石垣または濠（ほり）・土塁をめぐらしたが、中世に至って、天険を利用して防御をほどこす「山城」が発達し、もっぱら戦闘用であった。戦国時代以降は、領内統治・城内居住・権勢表示などを兼ねた築城に進み、いわゆる城郭が完成。多く平野にのぞむ小丘上または平地に築かれ、二重三重に濠をめぐらし、本丸・二の丸・三の丸などに郭（くるわ）を区分し、石塁上に多数の櫓（やぐら）類を建て、偵察・射撃に利し、本丸には天守閣を設けて郭の中軸とし、表には大手門、裏には搦手（からめて）の門を構え、住居用の殿舎をも備えた。き（城）。じょう。

（注）天守閣はより正確には「天守」といわれる。本文中ドイツ、ヨーロッパの城についても、「天守」という呼称を用いた。

資料 II 年表

フランク王国から神聖ローマ帝国へ
(Frankenreich / Heiliges Römisches Reich)

- ・ カロリング朝 Die Karolinger ゲルマン人のフランク族カロリング家

国王在位	(Ks 皇帝即位)
------	-----------

768-814 Karl der Große (Ks 800)

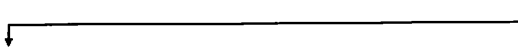
カール大帝がローマ教皇により皇帝冠を授けられた。これによりフランク王国は「ローマ帝国」が再興されたものということになった。

843年以降

西フランク王国
(フランス)

中フランク王国
(イタリア)

東フランク王国
(ドイツ)



《ドイツ》

中世盛期の始まり

- ・ オットー朝 Die Ottonen (das sächsische Geschlecht der Liudolfinger ゲルマン人のサキソニー族リュードルフィンガー家)

国王在位	(Ks 皇帝即位)
------	-----------

916-936 Heinrich I.

936-973 Otto I. der Große (Ks 962)

オットー大帝がローマ教皇により皇帝冠を授けられたことにより、ドイツは「神聖ローマ帝国」となる。

961-983 Otto II. (Ks 967)

983-1002 Otto III. (Ks 996)

1002-1024 Heinrich II. (Ks 1014)

- ・ ザリエル朝 Die Salier (das fränkische Geschlecht der Salier ゲルマン人のフランク族ザリエル家)

1024-1039 Konrad II. (Ks 1027)

1028-1056 Heinrich III. (Ks 1046)

1053-1106 Heinrich IV. (注)

注) ハインリッヒ 4 世はローマ教皇に破門された。そして教皇に請うて赦して貰った (1077年 カノッサの屈辱)。1084 Kaiserkrönung Heinrichs IV. durch den Gegenpapst.

- ・ シュタウフェン朝 Die Staufer (das schwäbische Geschlecht der Staufer ゲルマン人のスエービー族ホーエンシュタウフェン家)

1138-1152 Konrad III.

第一回十字軍参加

1152-1190 Friedrich I. (Barbarossa) (Ks 1155)

第三回十字軍参加

.....

1196/1212-1250 Friedrich II. (Ks 1220)

このフリードリッヒ 2 世で中世盛期 Hochmittelalter は終わる。

資料 III 図表

図表を次ページ以下に呈示しますので、本文の進行に従って参照してください。
なおここで図表の出典を示しておきます：

【図表 1】 Der Große Duden. Bd.3: Bildwörterbuch. Mannheim 1958, S. 563

【図表 2】 Pustebblume. Das Sachbuch 4. Schuljahr. Hrsg. von Rolf Pommerening und Jutta Ritter. Hannover 2001, S. 110

【図表 3】 【図表 4】 Gravett, Christopher: Knight.(Eyewitness Guides 43)
1993, P. 22, P. 23

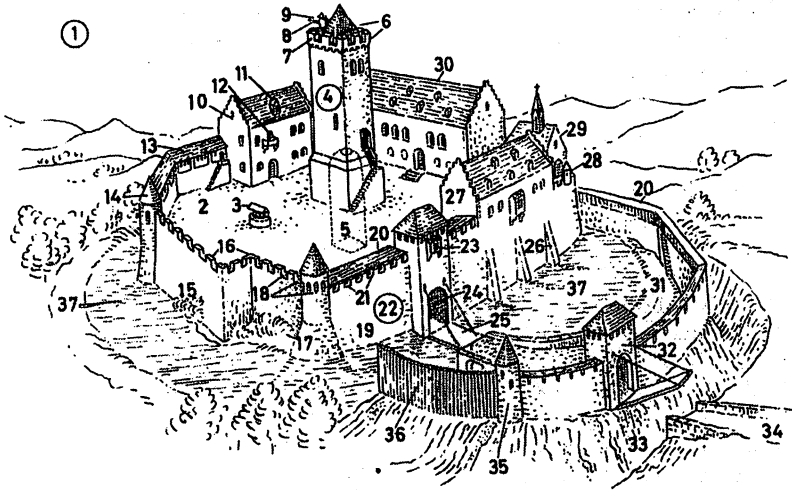
【図表 5】 Das Reich der Salier 1024-1125. Katalog zur Ausstellung des Landes Rheinland-Pfalz. Sigmaringen 1992, S. 250

【図表 6】 Das Reich der Salier 1024-1125, S. 212

【図表 7】 案内パンフレット： Die Kaiserpfalz in Kaiserswerth. Hrsg. vom Förderverein ALTE PFALZ e. V.

【図表 8】 Hotz, Walter: Kleine Kunstgeschichte der deutschen Burg. Darmstadt 1991, S. 95

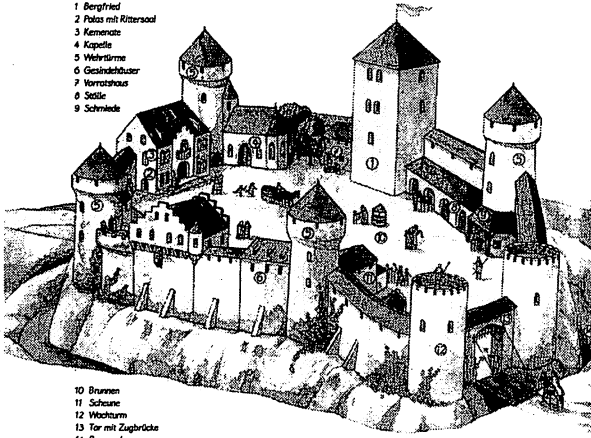
【図表 9】 Ulrich-Göttinger, Margot: Deutschkurs Düsseldorf. Ein Lese- und Arbeitsbuch zur Kultur. Düsseldorf 2002, S. 37



【图表 1】

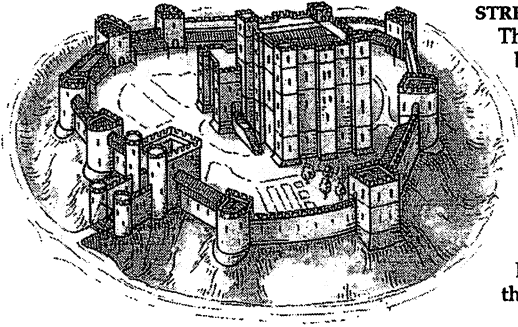
Ritter und Burgen (1)

- 1 Bergfried
- 2 Palas mit Rittersaal
- 3 Kemenate
- 4 Kapelle
- 5 Wehrtürme
- 6 Geschicksbau
- 7 Herrschaftshaus
- 8 Ställe
- 9 Schmiede



- 10 Brunnen
- 11 Schwanz
- 12 Wachtturm
- 13 Tor mit Zugbrücke
- 14 Burggraben

【图表 2】

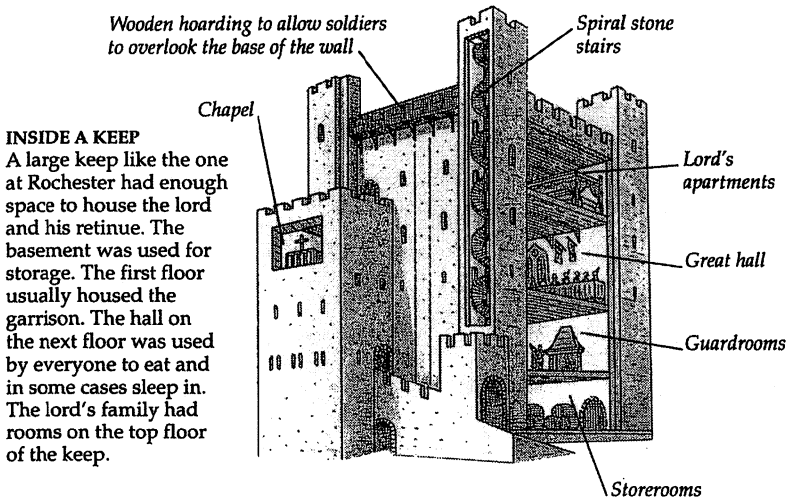


STRENGTH IN STONE

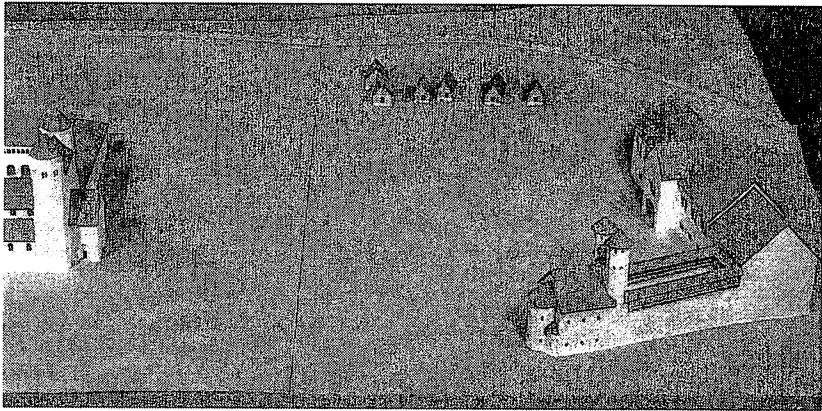
The stone donjon, or keep, became common in the late 11th and 12th centuries.

The larger ones could hold accommodation for the lord and his household. The bailey was by now often surrounded by stone walls with square towers. Round towers appeared in the 12th century.

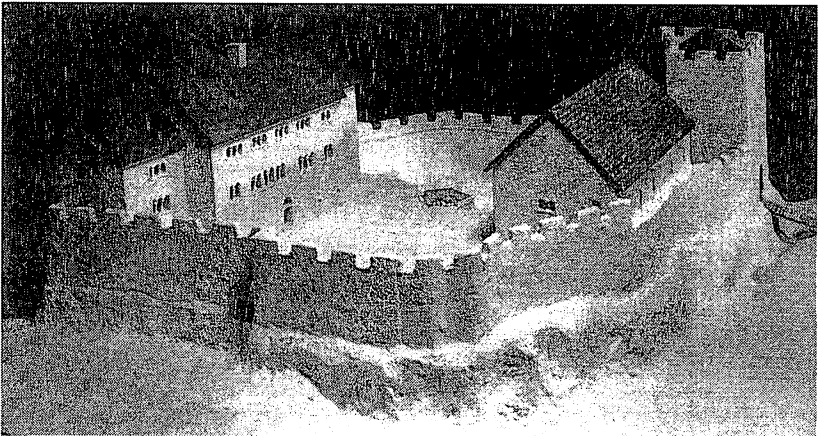
【图表 3】



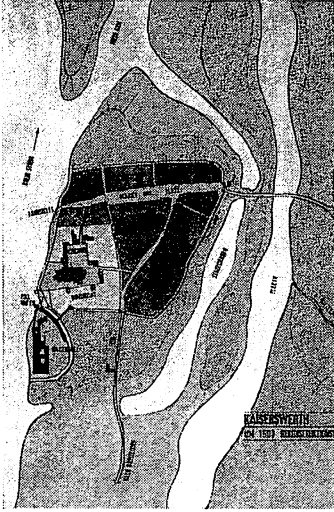
【图表 4】



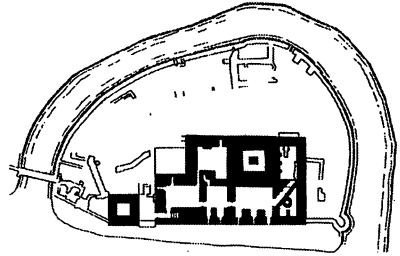
【图表5】



【图表6】

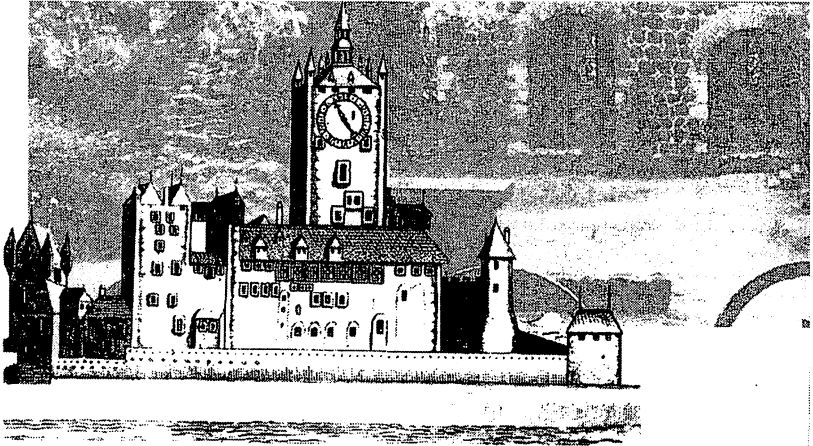


【図表 7】



Z 61 Kaiserswerth bei Düsseldorf, Grundriß der Pfalz nach Erkens und Renard aus Ebhardt I, 627

【図表 8】



Die mittelalterliche Barbarossa-Pfalz als Ruine
und vor der Zerstörung im Jahr 1702

【図表 9】